

沖縄のヤンキーの若

本稿では沖縄のヤンキーの若者たちが生きている地元社会について、そして彼らにとって学校がどのような場所であるのかについて描く。そしてそれらを通じてひとつの仮説を提示する。

私は沖縄のヤンキーの若者たちの社会調査を2007年頃から10年以上にわたり続けてきた。調査方法は参与観察という手法で、実際に彼らと10年近く付き合い、一緒に遊び、働き、飲みに行くという継続的な関わり方を通じて調査をすすめてきた。そのような手法をとったのは、彼らの多くが現実や直面する困難について言葉を中心にやりとりする文化に生きていなかったこと、意思疎通の一部で用いられた独特のうちな一ぐちを調査者である私が習得できていなかったこと、そして彼らと私が信頼関係を築けていなかったなどの理由による。彼らの現実や困難を調べ、彼らの言葉を習得し、信頼関係を築くために参与観察は最適の手法だった。

学校から去る沖縄のヤンキーの若者

仲里(仮名、以下同様)は、その調査で出会って長い付き合いのあった30代の男性である。彼は沖縄の中部地域に生まれ、地元の暴走族で活動し、中学卒業後に地元の建設会社で働いていた。

仲里 だから昔とかでもで一じ[とても]まじめに生きてきた人間とかいるさあ。

打越 はいはい。

仲里 俺なんかはこんなってやんちゃしてるさあ。夜は遊んだり、酒飲んでタバコ吸ってみーみ[みたいなこと]するの、あったー[あいつら]からしてみたら、本当はうらやましいやんばあて、自由に生きてうらやましいなあって思ってるばあよ。だから昔ってなんかやんちゃ坊主がもてるばあて。

打越 ですねえ。

仲里 確実やんばあて[なんだよ]。でも今となっちゃーよ、前から努力してるから、いい仕事ついて、人生逆転さ。あんし[それで]大人になってからの人生の方がながさんばーで[長いからよ]。

譲司 うん。

打越 そうですかねえ。

仲里 やんちゃしてる時までは10代まで、このはたち以降からは(逆転よ)。

(スーパー駐車場にて、2012年8月31日)

仲里は、まじめに学校に通った同級生たちと自身が異なる世界に生きており、若い頃と今では同級生たちと自身の人生が逆転したと、私とその場に居合わせた譲司に語った。そこには学校に敵愾心を抱いたり、学校にまじめに通

う生徒たちへの対抗心は読み取れない。事例の数は少ないが、この他にも調査で出会った沖縄のヤンキーの若者たちは学校へのこだわりをさほどもたずに、そこから自ら距離をとっていた。学校による排除も一部確認できたが、むしろ彼らは学校に通い卒業することの意味を感じておらず、自ら去っているようだった。以下では、このように学校に対抗的な態度をとらない特徴を沖縄固有のものとして位置付け、ひとつの仮説を提示する。

沖縄社会の特徴

その前に、沖縄社会の特徴を沖縄県と全国平均の総生産の産業別割合から確認する(右図)。

このグラフから、沖縄と本土のブルーカラー職に就くヤンキーの若者たちはそれぞれ異なる世界を生きていることが読み取れる。そもそもヤンキーの若者は、コミュニケーション能力を要する三次産業ではなく、体を資本とする二次産業が主な就職先である。そこでまず注目したいのは、沖縄の二次産業の全体比(14.1%)が全国平均(26.1%)の約半分である点である。つまり沖縄のヤンキーの若者たちが就く仕事は、全国平均の約半分しかないのだ。続いて、その数値を半分にしているのが、おおよそ全国平均と沖縄の製造業比の差(15.7%)である。つまり本土のヤンキーの若者たちにはある製造業に就くという選択肢が、沖縄の彼らにはすっぽりと抜け落ちている。だから沖縄のヤンキーの若者たちは学校に行っても仕事に就けないと見越して、自ら学校を去っていくのだ。建設業に適応するためには、特定の先輩のお気に入りとなったり、独特のうちな一ぐちや言い回しを中学在籍時から習得しておく必要がある。そのためには学校より地元の方が役に立つ。先輩との関係を重ね、その技法や経験を同世代から学ぶことができるからだ。

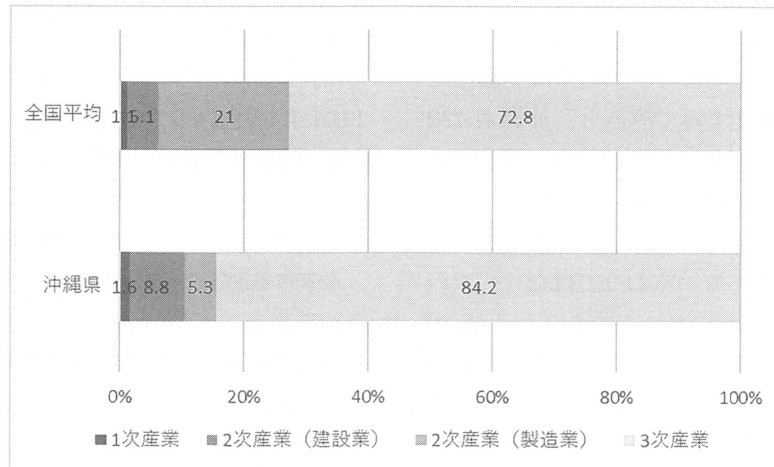
そして、このような学校から離れていく様子は、現在だけでなく「復帰」以降から現在までの長い期間にわたり生じてきた。沖縄の建設業界は、本土の大手ゼネコンと中小零細の地元の建設会社によって構成される。規模や実績がものをいう建設業界で、中小零細の地元建設会社が持続的に経営することはとても難しかった。それは沖縄戦や占領時代の不公平な施策や入札制度による歴史的事情、製造業がほとんど存在しない沖縄の産業構造、そして(製造業とは異なる)建設業固有の事情などによる困難さである(詳しくは打越(2008)を参照)。

戦後から「復帰」、そして現在に至るまで、沖縄の多くの建設会社は倒産し、そこで働く従業員は失業した。会社や従業員に蓄積された技術や経験はそのたびにリセットされた。そのような状況に建設業界としては、入札における談合などで乗り切ろうとした。また地元の建設会社は、地元の後輩た

者と学校

打越 正行
社会学者

沖縄県と全国の総生産の産業別割合



(注) 沖縄県、全国ともに 2013 年度
(資料) 内閣府「県民経済計算」より

ちを「調整弁」として扱うことで倒産の危機を乗り切ろうとした。彼らを雇うことで、仕事がある時は無理やりにも現場に連れ出し、仕事がない時には給料の支払いが遅れたり、一部支給といった形での対処が可能となった。そのような事情により、従業員の賃金が上がることは減多になかった。厳しい就労条件ではあったが、地元の後輩たちは会社が倒産しない限り働くことができた。それは、少年院上がりであろうが刑務所に行こうが、なにがあっても生涯にわたり働き続けることを可能とする「終身雇用制」だった。

先輩たちは建設現場で長年勤めると、後輩を思うままに「使う」ことができた。仕事面では使いパシリから重要な補佐役まで、生活面では飲み会後の送迎、バイクのメンテナンスや修理、ナンパ要員などを課した。また後輩も特定の先輩につくことで、不特定の先輩からの無理難題を受けることなく、ある程度緩和することができた。このように地元建設会社、先輩、そして後輩たちは、地元の厳しい上下関係を用いることで、なんとか厳しい業界を生き抜き、労働環境や労働条件を緩和してきた。

学校と工場の親和性／建設業の安定と学校

冒頭の仲里の語りと対照的なのが、カルチュラルスタディーズ、教育社会学などの分野における名著である『ハマータウンの野郎ども』(Willis, 1977=1996)における「野郎ども」である。著者のウィリスは、1970年代のイギリス社会の階級的再生産の様子を「野郎ども」の現実からいきいきと描いている。彼らは学校の教師やまじめな生徒たちに対抗的な態度を示し、そして学校制度にまで鋭い洞察はおよぶ。

仲里と野郎どもの学校への態度は対照的だ。野郎どもは学校に対抗し鋭い洞察を展開するが、それを可能とするの

は、その後に製造業の工場で働く見込みがあるためであり、沖縄のヤンキーの若者が学校から自ら去っていくのは学校卒業後に工場労働者となる見込みがないためである。この仮説において野郎どもも沖縄のヤンキーたちも、それぞれ合理的に振舞った結果の帰結である。

学校と工場は互いに親和的な関係にある。どちらも能力に応じて評価がなされ、また互いに規律訓練型の制度でもある。野郎どもにとって、学校で身につけたこと(教師に反抗することなど)が工場でも役に立つのである。他方で沖縄の建設現場は、内装、塗装、空調などの仕上げ作業、また鳶、左官などの熟練職を除き、そのようにはなっていない。4、5年勤めれば日給は上限に到達し、その後は何年勤めても日給も条件も変わらない。また作業手順についてのマニュアルは存在しない。あるのは納期で、それに間に合うように各班長の仕事の癖に合わせて後輩たちは働かざるをえない。だから彼らは早々に学校から去っていくのだ。

沖縄の学校は、ヤンキーの若者たちに職業分配機能を十分に果たせない。産業構造は急激に変化しないのならば、建設業界の安定化、そして従業員の能力や経験に応じた給与体系などを、一時期の景気によらない制度を整備する必要がある。そうすることで、ヤンキーの若者たちにとっても、学校が役に立つ場となるのではないか。

文献

- 打越正行, 2018, 「つくられたシージャ・うっとう関係——沖縄建設業の戦後史」 広島部落解放研究所編『部落解放研究』24号, 47-67.
Willis, Paul, 1977, *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Ashgate Publishing Limited (= 1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗, 労働への順応』筑摩書房).